

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開所当時、管理者・スタッフと共に考案した理念「利用者本位」を意識し支援を行えている。新しいスタッフにも理念の意義や地域との関わりの重要性も伝え共有した意識を持つように認識してもらっている。	ホーム理念が作られている。理念のもとに各ユニット毎の年間目標を掲げケアに当たっている。地域密着サービスの主旨を踏まえ、理念を意識し実践している。新人職員研修には必ず理念を伝え、十分に理解してから業務に入るようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会費を支払う事で、回覧板を回してもらい、地域の中で行われている事や、参加できる事はないかを意識している。ボランティアセンターへの協力を仰ぎ、今年は地域の傾聴ボランティアを招き、多方面でのネットワークを作れるようにしている。ホームで行われる「夏祭り」等への参加もチラシを回覧板に入れてもらう事で、こちらが行っている行事に参加を呼び掛けている。地域で行われている踊りや歌等の趣味を、こちらの行事の際には、それらの発表の場として参加して頂いている。	地区の情報は区長や民生委員、回覧板から入り、ホームからの発信も依頼している。ホーム駐車場で行われた夏祭りの際には、周囲の会社や店の好意で駐車場を借りることができ、地域の方、ボランティアや家族など大勢の参加があり、賑やかに行われた。地域の老人会からタオルの寄付も頂いている。公民館主催の「しめ縄作り」や「どんど焼き」にもお誘いを受け参加する予定でいる。また、近くの保育園から招待を受けたが2階での行事であったため体力的な不安もあり行かれず残念な結果となった。中学生や高校生のサマーチャレンジボランティアの受け入れも行った。民生委員の研修の場としてホームを提供している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	電話での問い合わせや、見学に立ち寄って頂いた際には、相談にのりアドバイスできる範囲で行っている。運営推進委員会などでも民生委員からの質問や相談などにこちらの実践の中から、事例を挙げながら話している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1度開催出来ている。家族代表・市や地域包括の職員・区長・民生委員の参加のもとホームでの支援状況・問題点等を報告し、意見・情報交換を行っている。この内容を他スタッフにも紙面にて報告しており、職員間でも話し合いの場を持ち、サービスの向上につなげている。	運営推進会議は利用者代表、家族代表、区長、民生委員、市介護保険課職員、地域包括支援センター職員で構成され、2ヶ月毎に開催し、ホームの取り組みや様子を伝えている。参加者から意見や助言をいただきホームの運営に活かしている。会議録は家族に送付されている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進委員会に参加してもらったり、認定調査で来訪した際には、ホームでの取り組みなどを伝えたりと、良好かつ協力関係に取り組んでいる。	介護認定の更新の際は家族から依頼を受けてホームで市の調査員に情報を提供している。介護保険課の担当者に運営推進会議に出席いただきホームの相談に乗っていただいたり、電話等でも報告・連絡し協力関係を築いている。「あんしん相談員(介護相談員)」の派遣については依頼済みである。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	すべての身体拘束は行っていない。排除の意味を全職員が勉強しており、すべき行為ではない事を理解している。	玄関やユニットの入り口・階段は施錠されていない。車イスの利用者でベッドより転倒する方がいたが職員で話し合い、布団で寝ていただき、職員二人がかりで車イスに移乗するようにした。外出や買い物が好きなのは勿論、そうでない利用者にも職員が声をかけ外出に誘うなどし、落ち着いた生活ができています。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修会に参加し、ミーティング等で勉強会を持ち、個々に注意を払うよう防止と意識づけを行っている。		

グループホームみわ・さくらユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度の利用を開始した利用者があり、資料を用意し、いつでも職員が閲覧できるようにしている。過去に勉強会も行っているが、更に理解を深める為に、新たに学ぶ機会を設けたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は、書面を使用し説明している。説明後に不安や疑問をこちらから問いかけ、十分に理解して頂けるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者からの「運営」に関する意見等は聞かれていない。家族からも利用者の状況報告する際に、要望など聞いているが、今のところ反映に至る意見はない。普段から家族とのコミュニケーションを密にし、聞き取った要望は必ずノートに記入し、職員間で周知徹底をしている。意思疎通ができる利用者は、カンファレンスにも参加してもらい、自由に意見してもらっている。	利用者・家族からの意見や苦情はノートを作り聞いた職員が記入するようになっている。家族の来訪が多いので声をかけ意見や思いを聞いている。職員は家族からの意見を共有し解決や活用にむけ取り組んでいる。「グループホームみわ通信」が年4回発行され運営推進会議議事録と一緒に家族のもとへ送られている。写真を中心に利用者の様子やホームの情報を伝えているこの便りはホームの生活の様子が分かり家族との意思疎通にも役立っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に2階開催しているスタッフ会議には、必ず出席し、職員の意見や提案を聞く機会を設け、できる範囲での意見反映に努めている。	会社幹部も出席し、月2回職員会議が行われている。その後ユニット毎に分かれ利用者の状況やケアについての話し合いを行っている。職員は定期的に目標を立て、管理者や施設長と個別面談を行い、達成状況について話し合っている。職員が提案や要望を発言しやすい環境にある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	月1回行われている全体会議にて、リーダー及び管理者からの報告により代表者は状況を把握している。また、月2回のスタッフ会議にも必ず出席し、職員の声に耳を傾けている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は、管理者や職員一人一人の実践と力量を把握できる状況にある。半年毎に職員それぞれがスキルアップの為に目標を立て、実践し結果を評価に繋げる取り組みを行っている。法人内外の研修は、希望した職員が参加できるように機会を確保している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホームネット会への参加の機会を作り、勉強会や同業者との情報交換や意見交換の場を設け、サービスの質の向上に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用施設や自宅に訪問し、直接本人と会い、色々な話をする中で、不安な事や要望等を聴き、気持ちを受け止めるように努めている。ホームにも来て頂く機会を作り、少しでも安心して頂けるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	申し込みの時点で、おおよその話を聞き、更に自宅等へ訪問した際や家族が希望された時に、直ぐに相談に乗れるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人の意向を尊重しながら、家族の現状を配慮しこちらで判断しかねる際は、今まで利用していた事業所やケアマネージャー等と相談し見極めを行っている。本人が納得するまで話し合いを設けたケースもあった。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	洗濯干し・たたみ、食事作り・片付け等の家事を一緒に行っている。また、行事に関わる準備にも参加している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	行事参加の声掛けや本人からの面会依頼を伝え来所してもらったり、関わりの機会を持ってもらう事で、共に本人を支えていく関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	会話の中から馴染みの人や、場所を引き出し、希望があれば外出する時のサポートを行う。また、ホームの行事に来て頂けるように、家族を通して声を掛けてもらったりしている。	若い時からの友人が訪れたり、甥や孫達の訪問、家族の訪問がある。家族と買い物や食事をする方も長時間になると「みわに帰る」と言い、家族は安心と寂しい気持ちが混ざり複雑な心境であるという。お盆、お正月に帰宅され宿泊する方もおり、馴染みの関係が途切れないよう支援を行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の同士の関わり合いを観察しながら、状況に応じながら間に入る様になっている。常に1人で居て孤立する事がないよう配慮(目配り等)している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	医療的な処置が常時必要になり、サービス利用が終了となってしまった利用者に次の入所先探しを手伝ったり、本人を見舞ったりと出来る範囲で支援を行った。今後もそのような状況になった際は、相談や支援に努める。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者一人一人と向き合って話をし、会話の中から聞き出す努力をしている。一つ一つの生活動作にも、本人の意思を聴き、確認して行っている。	生活歴や会話・動作から利用者が何を考えているか職員は考え行動している。本人の希望や意向を聞いたり、行動の中から推測し利用者本位に努めている。「ひもときシート」を作成しそれぞれの行動の原因を探り職員間で話し合いをしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	日常会話の中から生活歴等の把握をして、家族からの情報収集にも努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	表情・顔いろ・行動等の観察をし、直ぐに変化に気づけるように努めている。有する力に関しても見過ごしている部分があると予測し、様々な事に関わってもらっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日頃から本人の想いを良く聞いたり、何気ない対話の中で発せられたニーズ等を盛り込んでいく。家族の来所時に、本人の様子を報告し、意向確認している。体調管理に関わる事は、主治医と連携を取り、本人の意向を含んで取りこんでいる。月2回のミーティング時に、職員全員で課題やケアの方法を検討しプランに反映させている。	各ユニットの職員は固定されている。家族や利用者の要望を聞き、職員全員でケアの方法を話し合い介護計画に盛り込んでいる。介護計画は職員会議のモニタリングの時に職員からの意見を聞き、計画作成者が作り、出来上がった段階で家族に見ていただき確認していただいている。介護計画は定期的に見直しており、状況の変化がある時には随時変更している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護支援経過記録と合わせ、共有するべく情報を連絡ノートに記入している。また、毎日・日中ミーティングを行い、日々の様子や気づき等 話す機会を持ち、情報を共有しながら実践や介護計画の見直しにも活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	介護施設ではなく、共に生活していく場所として、本人のその時々様子・状況に合わせた支援を心掛け、柔軟な支援が出来るようにしている。		

グループホームみわ・さくらユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	行事の時など地域のボランティアを招き、共に楽しめるようにしている。運営推進会議には、地域の民生委員も参加しており、意見交換等、地域資源を活かし、関わりを大切に、暮らしを楽しむ事が出来るよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	日頃から本人の想いをよく聞き、家族とは来所時に本人の様子を報告し意向等を確認している。こちらで医師に伝えたい事や日常生活の様子などを書き込む連絡帳を用意し、情報交換・相談等を行っている。また、利用者の状況に応じて、他の専門医を進めたり、主治医に相談し紹介をしてもらう等、支援をしている。	利用前からのかかりつけ医を継続している方や利用後近くの医院に変更した方もおり本人や家族の意向に沿っている。受診はホームより「連絡帳」を持参していただき家族に付き添いをお願いしている。緊急の時は職員が付き添っている。ホームの協力医による住診もお願いできる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	定期的に情報交換を行っており、生活情報も把握出来ている事もあり、専門性が必要な時は、正しい判断をしてもらう等、適切に支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した際に、病院とこまめに連絡を取り、ホームでの生活状況の情報を提供したり、情報交換に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	日常生活の中で、さりげなく終末期についてどのようにしたいのか想いを確認するよう努めている。家族にも状態が思わしくない時など、今後どのようにするかを確認したりと、本人・家族の意向に沿うように努めている。	「重度化及び看取りの基本理念」を基に家族に説明し理解を得ている。職員は重度化や終末期全般に起こりえる事態に備え勉強会で学習をしている。実際に直面した時には家族、医師、職員で話し合い対応している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	ミーティング時に、看護師による急変時の対応や事故対応の勉強会が行われている。いざという時に冷静に対応できるよう実践力を見につけている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年間を等して通報・避難・消火訓練や緊急連絡網の伝達訓練を行っている。災害時に全職員は、利用者が迅速に避難できるような体制作りに努めている。地域との協力体制は、運営推進会議で話し合い、今後構築する予定である。	年2回の訓練が行われている。昨年度消防署立会いの時は昼間想定で行われ、今年は夜間想定で行った。通報訓練、消火訓練、避難誘導訓練を消防署職員立会の下で行っている。車イスの方は非常階段併設の滑り台を使用し行った。利用者や職員は消防署からの反省点を踏まえ次回に活かしていきたいと前向きである。居室の表札の裏には万が一のために家族の連絡場所などが書かれている。緊急連絡網の伝達訓練等不測の事態にも備えている。消火設備も万全であり、食料品や介護用品の備蓄も今後増やしていく意向がある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人の人間として関わり、人生の先輩でもあり、様々な経験をされてきた事を頭に置いて、言葉掛けや対応を行っている。自分の常識を相手に押しつけず、全てを受け入れられるようミーティング時に話し合いを行っている。	苗字か名前に「さん」付けで声掛けをしている。以前、利用者によっては「〇〇ちゃん」と呼びかけていたことがあったが、職員会議で人格の尊重という点で話し合い、呼び方を統一し、丁寧な言葉で対応している。トイレの誘導も小声で話しかけ、その人に沿ったケアを行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の生活の中で、こちらの意見を押しつけず、何が良いか・どうしたいのか等を本人の意志で決定出来る様な声掛けを行っている。またおやつや食事・好みの飲み物等も選んでもらえるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者それぞれのペースに合わせて、その日にどのように過ごしたいのが聞き、希望に沿って支援をしている。外出・買物も希望された時に、直ぐに対応をしています。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時や入浴時、外出時は利用者と一緒に服を選び、気に入った服を着てもらっている。希望により、美容室への同行もしたり、ホームに出張してもらい対応している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	メニュー決めから野菜切り・盛り付け・配膳等を無理のない範囲で一緒に行っている。	イベントとして、月1回選択メニューがある。利用者は出来る範囲で食事作りに参加している。メニューも利用者の希望を聞き、和気藹々とした食事の光景であった。利用者に合わせて食事時間はゆっくりと取っている。誕生日には希望に沿い、ホームで好きなメニューを立てたり、外食希望の方には職員が付き添って出掛けている。外出行事で出かけた時には出先で外食をすることもある。プランターで育てたきゅうり、茄子、トマト、おくら等も食卓に上る。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者それぞれに合わせた量で摂ってもらっている。野菜中心のバランスの取れた食事を提供できるよう工夫している。食事量・水分量の少ない方へは、必要に応じ記録を取り把握できるようにしている。水分が取りづらい方は、ゼリーで提供する等、工夫もしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に声掛けし、歯磨き等を行っている。自らできない方へは、職員が介助しながら行っている。夜は義歯を預り洗浄も行っている。		

グループホームみわ・さくらユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人一人の排泄パターンを把握し、行動を見守りながら声掛けを行っている。またトイレへの同行は本人の了解の下に行っている。	排泄はトイレで出来るようそっと声がけしている。現在、ホームの利用者は日中布パンツを使用し過ぎている。利用者によっては不安を訴える方もおりその場合にはパットを使用している。夜間はリハビリパンツとパット、ポータブルトイレ使用など、利用者に合わせて個別の対応をしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分を摂ってもらえるよう日中だけでなく、夜間にも声掛けを行っている。野菜中心の食事を心掛け、必要に応じて掛かり付けの医師と相談の上便秘薬の内服をしてもらっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	時間に捕らわれず、入りたい時にいつでも入れる体制を整えている。	入浴は週2回以上行われているが、本人の気持ちを優先している。声掛けに気を配りながら自然な流れで入れるように一人ひとりに沿ったケアをしている。入浴の時間は利用者が思いを話せる場となっているので長い方は一時間位入っている。日帰り温泉に出掛けることもあり、菖蒲湯や柚子湯、入浴剤等も使い楽しまれている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者一人一人が好きのように過ごせるように配慮している。安心して気持ちよく休めるよう本人に合わせた寝具や空調で室内の環境を整えている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情報一覧表を活用し、職員全員が、薬について理解している。内服薬の変更や状態の変化は職員全員が把握できるよう連絡帳や申し送りにて情報の共有化を図っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	それぞれの利用者の残存能力を把握し、調理・洗濯・掃除など、できる事を分担して実践している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	個々の希望に沿って買物や散歩に出掛けられている。年1回ではあるが、バス旅行も実施しており、その際、家族にも声かけて参加をして頂いている。	数人で近所を散歩するなど利用者の希望を大切に外出するように心掛けている。家族と一緒に買い物や食事に出掛けるのを楽しみにされている方もいる。ホームでは花見やバラの見物、日帰り温泉等にも出掛けており家族も参加している。諏訪湖と白樺湖の日帰りバス旅行は全員参加で出掛けることができた。	

グループホームみわ・さくらユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人や家族と相談し、希望にて本人管理としている。外出の際には、職員見守りにて支払いの支援もしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望時はいつでも自由に出来るようになっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	一つ一つの事を利用者を確認していきながら、不快な音や光がないか注意をしている。食卓に花を飾り、季節感を感じられるようにしている。	玄関を入ると3階までのエレベーターがあり、2階・3階が1ユニットずつのグループホームとなっている。エレベーターを降りると広い空間が広がりリビングルームがある。炬燵やソファ、テーブルが置かれ、利用者は思い思いの場所でテレビを見たり新聞を見たりしている。壁面には行事の写真がたくさん飾られている。装飾と消臭を兼ねた本物のような胡蝶蘭がリビングを明るくしていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	それぞれが自由に過ごせるような環境作りを心掛けている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人や家族と相談し、使い慣れたものや好みのもを持ってきてもらい、本人が居心地良く過ごせるようにしている。	利用前に使っていた家具を置いたり家族の写真が飾られている。使い慣れたペットなどが持ち込まれ、本人が混乱しないように一人ひとりの自宅での生活環境を継続し落ちつける空間になるよう工夫している。裁縫の好きな利用者には裁縫箱が置かれ何時でも使えるようになっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレ・浴室は分かりやすく表示をする。一人一人の力を把握し、自分でできる事へのサポートを行っている。		